

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Virginia Woolfにおける"elegy"の変遷： 死者との交流の可能性と限界

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Watabe, Sayoko メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1364

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



2. 博士論文審査の要旨

イギリスを代表するモダニスト作家の Virginia Woolf は、過去の文学的伝統を踏まえながらも、斬新な小説形式の中に繊細で精妙な心象風景を盛り込んだ独自の作風によって知られるが、本論文は、彼女の作品がはらむ“elegy”的な性格に着目しながら、その意味の解明を通じて新たな解釈の光を投げようとするものである。

幼い頃からの家族との死別や第一次大戦での知友の戦士などを通していわば「死」と向き合う生のあり方を絶えず模索していた Woolf が、その作品を書き継ぐ中で、どのような「死」との関わり方を見出すに至ったのかが、課の儒自身の日記やエッセイはもとより、数多くの批評書や関連書を丹念に参照することで、丁寧に追究されている。

“elegy”という言葉の定義や遺作の『幕間』の位置づけ方など、いくつかの問題はあるものの、難解な作品群を誠実に根気よく読みこなしした労作として高く評価できるとおもわれる。

論文審査結果

Virginia Woolf の主要作品 5 編を、時系列に沿う形で論じた本論文は、「序章」と本論文 4 章、および結論を兼ねた「最終章」より成る。

まず「序章」は、作品の“elegy”的な特性を採り上げる理由として、作者 Virginia 13 歳の時に亡くなった母親の Julia をはじめ、幼少期の身近な人たちの死が相ついでことに触れ、彼女の手許に残された人々の「記憶の断片」はたとえわずかであっても、それらをコラージュのように継ぎ合わせることで、「ただ過去を取り戻す」のではなく、作者が主体的・積極的に「失われたものと向き合う」ことを創作の課題とするに到った経緯について、初期の短編“A Haunted House”などを援用しながら論じている。

第 1 章は、早世した作者の兄 Thoby をモデルにした、初期の実験的作品である *Jacob's Room* (1922) を扱う。最後に第一次大戦で戦死する(らしい)主人公の Jacob には当初から奇妙な存在感の希薄さがつきまとうのだが、著者は Woolf がむしろ意図的に複数の視点からの断片的で瞬間的な印象の羅列という手法を用いたことに触れ、「固定された人物像を解体」するとともに、不安定に揺れ動く人物像のみが持つリアリティにこだわったのだと主張する。その一方で短編“Solid Objects”の中の有用性を失った「ガラス」や「磁器」の破片を収集する趣味をもつ主人公のように、時間の流れから取り残された「死」を思わせる廃物に独特の美を見出す感性が重要なモチーフとなっていることが指摘される。著者は、風雨にさらされた「羊の頭骸骨」や「廃墟となったパルテノン神殿」に対する Jacob の親近感を取り上げながら、こうして「死」を身近に感じる感受性が「永遠」への憧れと相まって、ある種の精神的豊かさをもたらす可能性を論じているが、この点には確かな説得力がある。

第 2 章が扱う *Mrs. Dalloway* (1925) の主人公 Clarissa は、その国会議員の妻としての生き方がしばしば批判的に捉えられる人物で、戦争神経症を患って自殺する Septimus に寄せる彼女の「共感」についても、独りよがりな思い込みの産物として否定的に解釈されたことが少

なくない。しかし本論文は、Septimus の周囲には彼の理解者が誰もいないのに、階級も年齢も遠く離れた Clarissa だけが少なくとも「理解に努めた」という皮肉な事実注目しようとしている。

夫や娘の気持ちが次第に遠ざかっていくのを感じながら、自分の意見を自由に分かちあえる相手がなかなか見つからぬ Clarissa が自らの意志を貫いた青年の姿に共鳴するのは不思議ではないし、“Death was an attempt to communicate.” という言葉にも嘘はあるまい。彼女が「青年とのコミュニケーションによって自分が選択した人生を生き抜くことを覚悟」したはずだとみなす著者の解釈は、充分傾聴に値するものだろう。

第3章の *To the Lighthouse* (1927) は、作者自身が日記の「この作品には〈小説〉に代わる新しい呼び名を考えたい……たとえば〈エレジー〉？」と記しているほど個人的な追悼のテーマが顕著な作品だが、特に母親 Julia に対する世代的反発心を大きく上回るほど強い思慕の念がほとんど全編を包みこんでいる。にもかかわらず Julia をモデルにした Mrs. Ramsay や、その長男・長女の死それ自体は、なぜかいかにも素っ気なく簡潔に第2部 “Time Passes” で言及されるのみである。

著者は、画家の Lily が Mrs. Ramsay のどうしても描きつくせない部分としての “Space” を強く意識していることに触れながら、ある意味で夫人に対するオマージュとして、キャンバス上にあえてその「空間」を残したままにしたのではないかと論じているが、さらに言えば一見目ざわりなその「空間」が Lily の目の前に立ちはだかるように存在する限り、彼女と Mrs. Ramsay の絆が断ち切られることもない、という本来の “elegy” 的なメッセージをそこに読みこんでもよいのかもしれない。

第4章が取り上げる *The Waves* (1931) は Woolf の文学形式上の実験のピークをなすともいえる作品、散文詩と戯曲の巧みなアマルガムのような作品構成には、よくも悪くも 19 世紀的リアリズムの枠組みを乗り越えようとする意識が如実に感じられる。しかし中心人物である Percival のインドでの急死というエピソードが語られるものの「死への追悼」というテーマは、次第に背後に退き始めているように思われる。

本論文は、主人公の一人 Bernard にとって、仲間の友情関係が「滴」(drop) から「水晶」(crystal) という堅固なイメージに変化するプロセスを追いながら、一方で彼が自分の「言葉」に自信をなくし、徐々に自己の内面に引きこもっていく様子をもていねいにたどっている。初老になった Bernard にとっては、「自分の人生を生きる」との実感が持てなかった Rhoda の自殺の痛ましい記憶が重くのしかかったままで “elegy” に必要な一定の「距離」をとる余裕などまったくない。最後に自らの生涯を振り返る Bernard の独自について、著者が、彼はようやく人生には「堅固さとはかなさが共存しうる」と気づかされるのだと論じるのは、的確で示唆に富む解釈と言えよう。

最終章の前半は Woolf の遺作となった *Between the Acts* (1941) を論じている。

この作品は特定の死者を悼むという趣向をもたないのだが、第一次大戦のもたらした傷が十

分癒えもしないうちに、また新たな戦争が勃発したことへのやり場のない憤りが、たとえば登場人物のせりふの一つ「突然の死という運命が頭上に差し迫っている」(“The doom of sudden death hanging over us,”)に見られるように、くまなく全編を満たしているという印象はぬぐえない。そのため著者も示唆するとおり、「過去の再認識」を目指した La Trobe の野外劇も、「失われた過去」への“elegy”とはなりえず、一種のパロディに終わったように感じられるのだろう。

後半のまとめとなる「結論部」では、このように抗うとも乗り越えることも不可能に思われる「死」に対して、むしろそうだからこそ最後までその意味を問い続け、闘い続けることを怠らなかった作者 Woolf の粘り強い精神力に対する著者の深い賛嘆の思いが語られている。

全体としてきわだって斬新な解釈や分析が数多くみられるわけではないが、あくまでテキストをていねいに読み込み、難解な作品群に対する自分なりの説得力ある解釈を築きえてことは高い評価に値することで、本学大学院博士論文として十分な内容を備えるものと判断する。

最終試験結果

最終試験は 2012 年 2 月 2 日午後 2 時から、三木記念会館で実施され、御興哲也（主査）、新野緑、辻本庸子の 3 名の本学教員と大手前大学の太田素子教授が審査にあたった。

審査は公開で行われ、最初に学位申請者が論文要旨を述べた後、各審査員が論文に関する意見や感想・質問を述べ、申請者がそれに回答する形式で進められた。

審査員からは“elegy”という文芸用語の定義とニュアンス、Woolf の文体的特徴、さらには“reality”という語の使われ方などについて多様な質問が出されたが、申請者の冷静で誠実な回答ぶりは十分委員を納得させた。

公開審査終了後、各委員がそれぞれの見解を述べ合い、本論文が博士論文として十分な成果をおさめたという点での合意が得られ、最終試験の評価を「合格」とすることが決定された。